# 特別講演『世界の中で宗教を考える』

池上　彰 先生
（ジャーナリスト・名城大学教授）

**池上**：皆さん、こんにちは。ありがとうございます。ご紹介いただきました池上です。

今、ご紹介いただきましたように「週刊こどもニュース」というのをやっておりまして、今日、ここを見渡しますと、非常にいろんな、バラエティーに富んだ方がいらっしゃっているわけですね。仏教に大変造詣の深い方もいらっしゃれば、あんまりそうじゃない方もひょっとするといらっしゃるのかなと思っております。この後、竹村先生が専門的な見地から仏教についてのお話をされると思いますので、私はその前座として、そもそも世界の宗教の現状はどうなっているのだろうか。そんな話ができればなと思っております。

これまで、いわゆる宗教の聖地にいろいろ行ってまいりました。例えば大変有名なのはエルサレムです。イスラエルが占領しているエルサレムというのは、実は１km四方の城壁。１km四方といいますと、東京ディズニーランドと同じです。東京ディズニーリゾートじゃないですよ。東京ディズニーランドは隣にディズニーシーというのができまして、両方でディズニーリゾートですが、その最初の方のディズニーランドの方ですね。あれがだいたい１km四方。ほぼ同じぐらいのところにユダヤ教、キリスト教、イスラム教のそれぞれの聖地がございます。

そもそも何であそこにあるのかといいますと、もともとあそこはユダヤ教だったわけですが、今から2000年ちょっと前、ベツレヘムでイエスという男の子が生まれて、これが長じてユダヤ教の改革運動をするようになり、エルサレムにあるユダヤ教の神殿までやってきて、そこで逮捕されて、十字架に掛けられ、殺害されるわけです。そして、３日後に復活をしたとされる。

ユダヤ教にはもともと救世主信仰というのがありますから、イエスこそがユダヤ教における救世主ではなかったのか。救世主、つまりキリストですね。イエスこそがキリストではなかったのかと考えたユダヤ教徒の人たちがやがてキリスト教徒と呼ばれるようになるわけです。

イエスが十字架に掛けられた場所の近くにお墓がつくられた。お墓があったとされています。イエスはその後、復活して天に昇ってしまいましたから、イエスの遺体はないわけですが、イエスが葬られたとされているところに教会があります。聖墳墓教会です。

しかし、イエスの後、ユダヤ教の王国がローマ帝国によって滅ぼされてしまいまして、その神殿の跡地に岩のドームがつくられて、ここがイスラム教徒にとっての聖地になって

います。ですから、結局、1km四方の中に集まっているわけですね。

そもそもあの岩のドームというのは岩を大事にしているわけですが、これは旧約聖書の中にアブラハムという敬虔な信者が神から試されるという話があります。神様がアブラハムの信仰心を確かめるために、やっと授かったわが子イサクを神にささげろと、こう神から告げられるわけですね。そこでアブラハムがわが子を連れて、丘の上に上って、岩の上にわが子を横たえ、そこでひと突きでわが子を殺そうとした途端、神様の声が聞こえて「アブラハムの信仰心は分かった。おまえを試しただけだった。殺す必要はない」ということになったという物語が旧約聖書に出てくるわけです。その岩を中心にユダヤ教の神殿が建てられました。ローマ帝国に滅ぼされた後、その岩がむき出しのままになっていました。

その後、今から1400年ほど前になりますが、アラビア半島のメッカというところでムハンマドという人が神の声を聞いたとして、その神の声を人々に伝えることになり、これがイスラム教となります。イスラム教の聖典クルアーンの中に、ある夜、ムハンマドが天使に連れられ、天馬に乗って遠い町に旅をし、そこから天に昇って、アッラーやさまざまな預言者に会って、また戻ってきたという一節がございます。この遠い町というのがエルサレムであろうということになり、その天に昇るとき、むき出しになっていた岩に足をついて、そこから天に昇って、また下りてきたとされておりまして、その岩にムハンマドの足跡というのが残っているのです。

岩のドームはなかなか普通の人は入れないのですが、私は中に入れていただきまして、ここがそのムハンマドの足跡だというところに触りました。相当大きな足跡でした。この岩を、風雨にさらされたままにしてはいけないというので、ドームで覆い、金箔を貼った。それが岩のドームです。かくして、3つの宗教の聖地ということになっております。

ローマ教皇がいらっしゃるバチカン、ここも特別の許可を得て、バチカン市国の中に入りました。システィーナ礼拝堂は美術館として一般の人が入れるのですが、そうではなくて、バチカン市国の中に入りましたら、何とその中にはスーパーマーケットもあります。世界中のカトリックの枢機卿の人たちがいるものですから、高齢化が進んでおりまして、診療所があって、薬をもらう人が大勢並んでいました。ガソリンスタンドもあって、バチカン市国の中にも人々の営みがあるのだなという、そういう様子も見てきました。私が個人的に一番行きたかったのは、お釈迦様が悟りを開いたとされるブッダガヤです。去年7月、念願がかないまして、ブッダガヤに行きました。

これはやっぱり本当に行ってみないと分からないということがあります。とにかく暑いです。7月ですが、気温が40度。40度だけならまだしも、湿度がほぼ100%です。そこで取材をしていますと、全身汗だく、びしょびしょになります。その後、ホテルに戻ってシャツを絞ったら、本当に水がしたたり落ちまして、あまりの暑さにカメラマンが動けなくなりまして、ちょっとしばらく昼は休憩ということにしました。ゴータマ・シッダールタはここで座禅を組んでいたのか。こんな暑さの中にいらっしゃったのだな。本当に行ってみないと分からないですね。

そして、もう一つ、行ってみて初めて知ったことがあります。ゴータマ・シッダールタは菩提樹の下で悟りを開いたとされていますが、あれは違うのですね。木の下で悟りを開かれたものですから、その木を悟りを開いた木というので菩提樹と、後から名前が付いた

のだということを行ってみて分かりました。考えてみたら、そうですね。菩提樹というのは悟りを開いた木という意味ですから。

サウジアラビアにも２回入りまして、メッカは、これはイスラム教徒になっていないと入れません。私はイスラム教徒じゃなくて仏教徒ですから、もちろんメッカなんていうのは入れないのですが、メディナの預言者モスクの横まで行くことができました。実にさまざまな聖地を見てきました。

こうやっていろんなところに回ってきまして、去年の12月にはセルビアに行ってまいりました。おととしから去年にかけて、大勢のシリアからの難民、あるいはアフガニスタンからの難民がドイツを目指しました。ドイツに行くため、陸路をずっとバルカン半島を歩いていきますと、セルビアからハンガリーに入り、オーストリアを通ってドイツに行く。ところが、ハンガリーが、難民が入ってくるのは困ると言って、国境を閉鎖してしまったものですから、セルビアまでやってきて、その先に行けないという難民が１万人、滞留しているのですね。その現状を取材してきました。

そうやって世界を見てきたら、去年の11月、とんでもないことが起きました。まさかまさかのドナルド・トランプ大統領誕生ということですね。次から次へといろんなことを言っていますよね。

でも、それにしても、なんであんな人が、というふうに思いますでしょう？　これ今、世界を覆っているグローバリズムの波に対する、いわゆる反動というのが起きているのだろうということですね。トランプさんの政治集会、去年の２月に、アイオワ州で開かれた、そこに行ったのですね。トランプさんの政治集会というのは非常に閉鎖的でして、海外のメディアは取材させないのですね。日本からのメディアと言っても一切入れないのです。入れたところで１票にもなりませんから。で、日本から行った別のメディアは「ドナルド・トランプの政治集会には外国のメディアを一切閉め出して、入れることができないのです」と外でリポートしていましたが、私はそういうことはしませんでした。政治集会の会場の前に、いろんなトランプグッズが売っておりまして、Make America Great Again と書いた、赤い帽子を買って、それをかぶり、トランプを大統領にというバッジを胸に付けて、入り口に行ったら入れてしまいました。そのまま中で取材をしたということです。

ところが入ってみて、非常にいたたまれない思いがしました。会場は白人ばかりです。白人の、とりわけ男性ばかりですね。そういうところにこういうアジア系の顔つきをした者は、大変目立ってしまいます。こういう人たちに支持されているのだと思ったのですね。

その後、ヒラリーさんの政治集会にも入りました。こちらは居心地悪くないのですね。ありとあらゆる人種がいるのです。白人も黒人も、アジア系もヒスパニックも、あるいは明らかにイスラム教徒の人たちも、あるいは男性だか女性だか分からない人もいるのですね。毛むくじゃらで女装している人がいまして、うーん、アメリカにもマツコがいるのかと、こう思ったわけでありますが、本当にさまざまな人種がいる。ただし若い人がいない。年配の人たちばかり。若い人の支持を得ていないなということですね。

その後、今度はバーニー・サンダースの政治集会にも参りました。ちょうど民主党の大統領候補選びで、ヒラリーさんでやすやすと決まると思いきや、バーニー・サンダースという人が迫ってきて、激しい争いをしたわけですね。そのバーニー・サンダースの政治集会に入りましたら、これがまた居心地が悪いのですね。とにかく集まっている人が、若者

ばかりです。二十歳前後の若者がいっぱい入っていまして、バーニー・サンダースが現れますと、「バーニー、バーニー、バーニー」とかけ声をかけて、みんなピョンピョン跳ねるのですね。ロックコンサートののりであります。ピョンピョン、ピョンピョン、みんな、全員が跳ね続けるんですね。とてもそれにはのっていけないということがありました。こんなに、バーニー・サンダースの支持者がいるのだなと思いました。

これはどういうことなのかと言いますと、世界を覆っているグローバリズムの流れの中で、一方では、右の立場から反対運動しているのがトランプで、左の立場から反対をしているのがバーニー・サンダースという、こういう構図になっているのだというふうに思いました。

そもそもこのグローバリズムというのは、いつから始まったのか。東西冷戦が終わって以降です。それまで、第二次世界大戦後、世界は東西冷戦が続いていました。東側、いわゆるソ連を中心とした東ヨーロッパは鎖国のような状態で、西側の資本主義国との貿易というのは、ほとんどありませんでした。ですからいわゆる資本主義国の国は、西側諸国だけでの経済圏を作っていました。そういう中で、ヨーロッパでは二度の大戦を経て、全土が焼け野原になってしまった。これを、二度と戦争がないようにするにはどうしたらいいかと考えて、人々が国境をなくしてしまえばいいのだと考えたわけですね。国境がなくなれば、人や物の移動が自由になる。そうなったら、そもそも戦争が起こることがないだろうという、大変高い理想を掲げて、欧州統合に向かって、少しずつ進んでいくわけです。

フランスとドイツの間に、アルザスロレーヌ地方というのがありまして、石炭がたくさん採れる。そしてその石炭を燃料にした鉄鋼業が盛んになっているわけですね。すっかり敗戦で産業がなくなってしまったドイツは、その石炭と鉄鋼業で国の再建を進めようとします。ところがたびたびドイツの侵略を受けてきたフランスは、またドイツが強い軍事大国になるのではないかと恐れて、これに反対をするわけです。でもそれがなければドイツの復興が成り立たないというときに、周りの国が入ってきて、「ドイツが信用できないというなら、周りの国々が監視役になりましょう。ドイツの鉄鋼業が軍事産業に使われないように、みんなで管理しましょう」というシステムをつくるのです。これが『欧州石炭鉄鋼共同体』、６カ国でつくられました。ここから始まるわけです。

フランスにしてみれば、ドイツが信用できない。じゃあ周りの国が一緒に入って、信用を醸成していくにはどうしたらいいのか。信頼を回復するにはどうしたらいいのかということをずっと考えるわけです。こうしてこれが今度は『欧州経済共同体』、EEC、そして『欧州共同体』、EC、そしてEU、『欧州連合』と拡大していったわけです。少しずつ進んできました。その結果、人やもの移動が自由になります。あるいは国境での審査をしないという、シェンゲン協定というのが結ばれて、シェンゲン協定が結ばれている国の間では、一切、パスポートチェックもない。自由に行き来ができる、こういうやり方になりました。

東西冷戦が終わり、ソ連が崩壊しました。ベルリンの壁も崩壊し、東ヨーロッパの国々が大挙して、資本主義体制に変わるわけです。われわれも、そもそもヨーロッパだ、ヨーロッパは一つだろ、われわれも入れてくれということになりました。東ヨーロッパの国々は社会主義政権の下で、教育水準は高かったのです。質の高い労働力です。一方、社会主義で、経済はひどい状態になっていましたから、賃金が安いわけです。質が高くて、低賃金で働く労働者が大量に入ってくることになります。となれば当然、それまでの西ヨー

ロッパの国々の企業は大喜びするわけです。質のいい労働力が安く雇えるというわけですから、どんどん入れよう、入れようということになります。その結果、東ヨーロッパの国々が、EUに入ることが認められました。

ところが、経済格差があまりにひどいわけです。EUは人と物の移動が自由ですから、大勢の東ヨーロッパの人たちが、西側に入ってくるわけです。イギリスにポーランド辺りから移民が入ってきます。移民とはいったって、EUの中で移動は自由なわけですから、これを断ることはできないわけですね。いってみれば一つの国の中での移動と同じことになるわけです。九州から北海道に行くのと同じようなことで、入ってくることができるわけです。これは断ることができないわけです。低賃金で熱心に働きます。結果的に、イギリスの労働者の仕事がなくなってしまったり、「これまでどおりの仕事がしたければ、給料、切り下げるぞ」と言われるようになったりして、移民が入ってきたことに対する反発というのが広がっていくわけです。いわゆる東西冷戦が終わって、グローバリズム、世界は一つのマーケットだという、そうなってもちろんメリットもあった一方で、働く人たちにしてみればとんでもないということになり、グローバリズムに対するアンチの運動が起きます。その結果がイギリスのEU離脱につながっていったということです。

そして、その東ヨーロッパだけではありません。中国も世界のマーケットに入ってきました。世界の工場として、大変安い物を作ってこれを輸出する。アメリカ国内は、中国製品であふれかえるということになるわけです。先ほど、私はドナルド・トランプの集会に入るときに、Make America Great Againの赤い帽子をかぶったという話をしましたが、出てきた後、帽子を見たら、Made in Chinaと書いてありました。それぐらい中国製品があふれているわけです。そして、アメリカ国内の鉄鋼業ですとか自動車産業とか、こういうところがどんどん廃れていくわけです。国外に工場を移します。産業の空洞化が進み、働く場所を失う人、白人たちが大勢生まれてきたということですね。こういう人たちがドナルド・トランプに投票したということなんです。ドナルド・トランプ、面白いじゃないかということになったわけです。

といいますのも、ドナルド・トランプというのは、皆さん、ご存じのように、平然と差別的なことを言うわけです。良く言えば、歯に衣着せぬ発言をするわけです。アメリカという社会で、建前を大事とする中で、本音を言う政治家。これは面白いじゃないかと考えた人たちがいたということなのです。といいますのも、アメリカではいわゆる差別を少しでもなくそうというので、いろんな物の言い方が大きく変わってきました。男女を区別するような言い方はやめようということです。例えば私が中学生のとき、英語の勉強を始めたばっかりの頃、警察官のことはPolicemanと習いました。でも女性の警察官が出てくるわけですから、Policemanというわけにはいかないだろうということになり、Police Officerと呼ばれるようになりました。よくハリウッド映画を見ていると、いわゆる日本でいう「お巡りさん」、と言うとき、向こうでは「Officer」と呼び掛けていますね。Police Officerということになりました。消防士はFiremanだったんですが、いや、Firemanとは限らないだろうというんで、Firefighter、火事と戦う人ということになりました。会議の議長は、私の子どもの頃はChairmanと習いましたが、いや、女性もいるよねっていうので、Chairpersonと呼ばれるようになったわけです。あるいはテレビのニュースのキャスター。これはAnchor Manと呼ばれていました。Anchor Man、Anchorというのは最終走

者という意味ですね。テレビのニュースというのはリレーのようなものである。まず現場で記者が取材をし、カメラマンが撮影をし、それを編集し、最終走者のキャスターが視聴者に向けてニュースを伝えるという意味で、最終走者、Anchor Manと呼ばれていたわけですが、女性のニュースキャスターが出てきますと、Anchor Womanと呼ばれるようになるんですが、Anchor ManとAnchor Womanと言っているよりは、えーい、面倒くさい、どっちもやめようっていうんで、Anchorと今は呼ばれるようになった。そういうふうに差別をなくそう、あるいは男女の違いというのをなくそうじゃないかということになっていくわけです。

私の子どもの頃は、アメリカの先住民は、インディアンと呼ばれていましたよね。これはコロンブスがインドに行こうと思って、アメリカ大陸にぶつかって、ここがインドだと思い込んで、インド人、インディアンと名付けちゃったのがそのままでしょう。普通にインディアン、インディアンと言ってたんですけど、インディアンとはインド人という意味ですから、おかしいだろうというので、アメリカン・インディアンと言われるようになり、今はそうじゃないですね。ネイティブ・アメリカン、アメリカ先住民というようになりました。あるいは黒人のことはニグロと言っていたんですが、そういう差別的なことはやめようじゃないかといって、今、African American、アフリカ系アメリカ人と言い換えるようになりました。そういうことがずいぶん出てきているわけです。

それが中にはかなり行きすぎた表現というのもあるんですね。例えば背の低い人のことをチビと言うと、これは差別語になる。こういう言い方をやめよう。背の低い人という言い方はやめようじゃないかと言って、どういう言い方になったか。垂直方向にチャレンジされている人という。ちょっとあまりに極端だよねという、こういう言い方をPolitically Correctと言うんですね。政治的に正しいこと。Politically Correct。とにかく建前の世界で、正しいことだけ言いましょうということが広がったことに対する反発があったとき、ドナルド・トランプはそんなことに関係なく暴言を吐く。これは本音を言ってくれる政治家が出てきたといって、多くの白人の労働者たちが、ドナルド・トランプを大統領にしようと考えるんですね。

アメリカでは大統領選挙は11月でしたが、７月に党大会が開かれました。そして２月から州ごとに、党大会に出る代議員を選ぶ選挙というのが行われたのです。いわゆる予備選挙なんですが、このときに、これまで政治に関心のなかった白人たちが、「よし、トランプを共和党の大統領候補にしてやろうじゃないか」といって、それぞれの共和党の集会に参加して、ここで投票するのです。といいますのも、アメリカの共和党や民主党というのは、出入りが非常にオープンでして、その州ごとの大会に、それまで共和党と何の関係もなかった人がいきなり行って、「共和党員になりたいんです」と申し込み、その場で名前を書けば、共和党員になれるのですね。その場で投票できるわけです。つまり従来の共和党員でない人たちが、どっとやってきて、言ってみれば共和党がのっとられちゃったのです。このため、去年、共和党の党員数が激増しています。トランプは「俺が共和党員を増やしてやった」と言っているんですけど、共和党はのっとられてしまったわけですね。ですから選挙中に、共和党の主流派という人たちが、トランプは支持できないとか、トランプを批判していましたね。あの人たちは従来の共和党員なのです。そこにトランプを大統領にしたいという連中が、どっと共和党になだれ込んできて、トランプが共和党の大統領

候補になったわけです。そして今度は、大統領にしようじゃないかというわけですね。去年の11月８日の、大統領の投票日。あちこちで「投票所はどこなんですか」とか、「投票はどうやればいいんですか」とか聞いている人たちがいたと言われています。これまで政治に関心がなく、投票に行ったことのない人たちが投票所に足を運び、トランプに投票したんですね。その一方で、ヒラリーさんを嫌う人たちはいるわけですね。トランプは嫌だよね。でもヒラリーもなあ。どうせでも、世論調査だとヒラリーが勝つという予想になってんだろ。じゃあ俺が行かなくてもいいよね、というわけで、従来の民主党支持者の多くが、投票所に足を運ばなかったのです。その結果、まさかの結果になったということです。

つまり、世界が東西冷戦以降、グローバリズムが進んで、アメリカの産業がどんどん空洞化してくる。それによって、大変暗い、つらい思いをしている人たちがトランプに期待をかけたということです。ヒラリーさんだったら、オバマ政権のやり方をそのまま継承しますと言っていますから、世の中は、ヒラリーさんだったら変わらない。トランプだとどうなるか分からないけど、少なくとも現状を変えてくれるよね。現状はどん底なんだから、これ以上、悪くなりようがないんだから、トランプだったらとにかく変えてくれるだけでいいじゃないか。こういう人たちがトランプに投票したということです。これがトランプ現象、グローバリズムに対する、いわば右寄りの、保護主義ですよね。アメリカさえ良ければいいんだ。他の国がどうなったっていい。アメリカさえ良ければいいという人たちが、トランプを大統領にしたわけです。

一方、そういうグローバリズムによって格差が広がっていることに対して、その格差をなんとか、少しでも縮小しようじゃないかという形で動いたのはバーニー・サンダース。この人はアメリカ、こんなむき出しの資本主義をやっているから、グローバリズムの中で格差が広がっていくんだ。北欧のような、社会民主主義のやり方を採れば、社会主義的な要素を入れれば、アメリカの格差は縮まると、こう主張したのです。とりわけ、彼が若い人たちから支持されたのが、公立大学の授業料を無料化するという主張でした。アメリカは国立大学が存在しません。圧倒的にほとんどが私立大学で、一部州立大学があるわけです。この州立大学がバーニー・サンダースがいうところの公立大学です。州立大学。その州の出身者は比較的学費が安いのですが、外から行こうとすると、やはり高くなります。この学費がどれくらいかといいますと、例えばハーバード大学の場合、年間の学費が400万円。４年間だと1,600万ですね。ヒラリーさんが出たのはボストンのウェルズリーという女子大学ですが、ここは全寮制です。ですから、寮での生活費も含めての学費が年間500万円です。４年間で2,000万円。とてつもなく高いわけですね。今、さらに学費が上がっています。

アメリカの大学生というのは、どこかの国の大学生と違って、親が学費を出してくれないのです。「18歳になったらもう大人なんだから、さっさと家から出ろ」と言って、家から追い出されて、「学費は自分でなんとかしなさい」と言われるわけです。そこで何とか奨学金をもらおうとするわけです。返済する必要のない奨学金がもらえた人はいいんですが、そうでない人の場合は金融機関で学費ローンを組みます。ということは、ウェルズリーを出たら、４年間で2,000万円の借金を抱えるわけです。その後、給料の高い会社に入れればいいですが、そうでない、非正規労働だったりしますと、当然、お金が返せない。学費ローン破産というのが大変大きな問題になっています。でも、その代わり、自分の財

布、自分の懐を痛めて学費を出すわけですから、アメリカの大学生は、それはそれは一生懸命勉強するわけです。どこかの国の大学生は、親が金を出してくれるもんですから、自分の懐が痛まないもんですから、授業を真面目に聞かない。さぼったり、居眠りしたりするということが起きてしまうということがあるんです。こういうときにバーニー・サンダースが学費を無料にすると言ってくれれば、これは大喜びですね。じゃあその財源はどうするのか。ウォールストリートの金持ちから金を取ればいいんだ。非常に社会主義的な主張ですよね。それでまたバーニー・サンダースに、若い人たちが熱狂したということがあります。世界のグローバリズムが進んで、格差が広がる。そういう中で、左側からグローバリズムに反対した、それがバーニー・サンダースということですね。いってみれば、トランプ現象とバーニー・サンダース現象、コインの裏表の関係になっていたということです。

こうしてトランプ大統領というのが誕生したんですが、それからもうとにかく、ひどいことをいろいろ言っていますよね。「メキシコとの間に壁を造るんだ。その壁の金はメキシコに出させるんだ」と言っていました。選挙中、私はそんなものは出せるわけないだろうと、メキシコとの間に壁を造る、その費用はメキシコに出させるぞ。メキシコが「そんなもの出せない」って言ったら、それで終わりだろう、と思っていたら、そうじゃないんですね。メキシコが金を出さないなら、まずアメリカがお金を出して、壁の建設を始める。そしてメキシコからアメリカに入ってくる商品に、20%の関税をかけて、その関税の収入を壁の建設費に充てようということを言い出しました。こうなりますと、メキシコがアメリカに物を売れなくなってしまうということになりますね。これは本当に人ごとではありません。日本の自動車産業は、現在、メキシコとアメリカとの間は関税がかかりませんから、人件費の安いメキシコで工場を造り、そこで作った自動車をアメリカに売るというやり方をしているわけですね。日本とメキシコとの間の行き来が非常に盛んになったもんですから、来月から全日空が、成田からメキシコへの直行便を飛ばすことになったんですね。それが、トランプがメキシコからの商品には関税をかけるなんていうことになったら、メキシコに工場を作ってもうまくいかないよ、ということになるわけです。日本の自動車産業がみんな頭を抱えていますし、全日空も頭を抱えている。決して人ごとではないということです。

でもこれ、考えてみますと、いわゆる近隣窮乏化政策です。メキシコからいろんな商品が入ってくるから、じゃあ壁を造り、あるいはメキシコからの商品に高い関税をかけるということになれば、メキシコの産業界がめちゃくちゃな状態になりますよね。ということはメキシコの経済が、せっかくここまできたのに、一挙に貧しくなっていくということですね。アメリカさえ良ければいいんだ。アメリカファーストということは、メキシコ経済がめちゃくちゃなことになるわけです。そもそもアメリカとメキシコの間で関税をかけないようにしましょうという、NAFTA、北米自由貿易協定というのは、それをすればメキシコの経済が豊かになっていく。そうなれば、メキシコの人がわざわざアメリカに、不法移民で入らなくて済むようになるだろうといって、これをつくったわけですね。ところがトランプがそこの壁を造ってしまったら、メキシコの経済が成長しない。貧しくなったら、一段と多くの人がアメリカに入ろうとして、不法移民が入ってくるんですね。結局これはとんでもないやり方になります。壁を造ったら入ってこないのか。今も壁はあるんですが、

壁はあっても、トンネルを掘って入ってくるんですね。中には大胆な人がいて、壁にドアを作っているんですよ。壁にドアを開けて入ってきたり、かなりの部分が鉄のフェンスになっているんですね。フェンスがあちこちで破られています。とても不法移民の流れを止めることはできないんですね。それは、隣の国が豊かになれば、不法移民の流れを止めることができるというのに、それを無理やり、壁を造って止めようとする。これがドナルド・トランプのやり方なんだということです。ドナルド・トランプに、仏教をちょっとでも学んでもらえればと思ってしまうんですが、こういう状態になっているわけです。

ドナルド・トランプの就任演説というのは、ご覧になった方、いらっしゃるかもしれません。あるいは新聞に、その英文が出ていました。これ、ぜひ読むことをお勧めします。というのは、大変易しい英語で書かれているからです。アメリカの小学校５年生に分かるレベルの英語で書かれているのですね。著しく格調に欠けるんですが、大勢の人たちによく理解してもらえるわけです。つまり、学歴のない、肉体労働者の白人の人たちでも、あのドナルド・トランプの演説はよく理解できるわけです。明らかに自分に投票した人に向けて演説をしているということです。格調の高さが全くないのですね。ですが、日本で、中学生、高校生でも理解できるような英語になっています。関係代名詞なんて一切使っていませんからね。主語、動詞、主語、動詞、目的語。主語、動詞、副詞の、もうそれだけでできている、大変分かりやすいものなんです。この中に聖書の一節が出てくるのです。「聖書ではこういっています」と言っています。また、演説の中では、要するに家族がみんな集まって、一緒にいることはうれしいことだ、幸せなことだという一節を引用しているんですね。これが演説の中では聖書という言い方をしているのですが、実際には旧約聖書の中の詩篇。詩というのはポエムですね。詩がいろいろ書いてある。そこからの引用なんです。これがまさにアメリカという国が、実は宗教大国であるというのが見えてくるのです。

アメリカという国、そもそもはヨーロッパ、あるいはイギリスで抑圧をされていた、ピューリタンと呼ばれる、清教徒ですね。そういうキリスト教徒たちが迫害を逃れて、新大陸のアメリカにやってきて、ここで植民地にして、国造りを始めていくわけです。そして13の植民地ができた段階で、イギリス本国から重い税金をかけられたことに反発をして、戦争になります。そして戦争の結果、独立を果たします。このときに、アメリカは、さあ、じゃあ宗教との関係をどうしようかと考えるのです。アメリカは国教、つまり国家としての宗教はない、という形になっています。ところがこれ、厳密に言いますと、13の植民地はいずれもキリスト教徒たちがつくった植民地ですから、そこにはピューリタンもいれば、クエーカー教徒もいる。いろんな宗派のキリスト教徒たちがいたのです。そこで、そのどこかの特定の宗派を国教にすることはしないようにしようということだったのです。そもそも全員がキリスト教徒であることは前提だったのですね。その上で、キリスト教の中のどこかの派を国教にしないという、これがいわゆる、アメリカは国教を持たない。あるいは政教分離という言い方になっているのです。そもそもはキリスト教国家であることが前提です。ですから大統領の就任演説のときに、聖書に手を置いて宣誓をする。そして最後はGod bless you, God bless America、人々にご加護がありますように。アメリカに神のご加護がありますようにと言うわけです。これはつまり、そもそも神が存在をしているということを前提にしています。なにせアメリカのドル紙幣には、In God We Trust、われ

われは神を信じるとはっきり書いてあります。キリスト教の国として誕生したわけです。

ですが、ユダヤ教徒の人たちも大勢いるのです。実はイスラエルにいるユダヤ人と、アメリカ国内にいるユダヤ人と、ほぼ同数です。ユダヤ人の人たち、アメリカ国内では金融業界やジャーナリズムに大勢いて、政治的な力も持っています。そうしますと、アメリカの大統領として新約聖書を引用しますと、ユダヤ人は反発するわけです。ユダヤ人にとっての聖書が、キリスト教徒にとっては旧約聖書になるわけです。イエスの言行録をまとめたものが新約聖書になるわけですね。キリスト教からすれば、イエスが現れた、そして天に昇っていったことによって、私たちは神と新しい契約を結んだ。だから新しい約束の聖書になり、それまでの聖書は旧約聖書、古い約束の書と名付けるわけです。ですから、キリスト教徒にとっては旧約聖書と新約聖書があるのですが、ユダヤ教徒にとっては聖書しかない。旧約聖書という言い方をすると、ユダヤ人は反発します。「聖書はこれだけだ」と言うわけです。ですから、大統領が演説をするときに、新約聖書から引用しますと、キリスト教徒はいいんですけど、ユダヤ教徒が反発をする。旧約聖書から引用すれば、キリスト教徒にとっては旧約聖書も新約聖書も聖書ですから、なんの問題もないのです。ですから、トランプ大統領の聖書の引用は、旧約聖書からです。こういうふうに、アメリカの大統領は、演説のときに気を使います。キリスト教徒だけが集まっているところでは、新約聖書でイエスの言葉を引用すればいいのですが、全米向けに演説をするときには、ユダヤ人もいるわけですから、これは旧約聖書を引用するということになるわけです。

かくして、彼は旧約聖書を引用したのです。しかし、トランプという人、そんなに信仰心があるとは思えないのですね。どっちかっていうと、なんちゃってキリスト教徒なんですね。教会に行くとか、お祈りをささげるなんて、全然ないんですね。にもかかわらず、ここで旧約聖書、つまりユダヤ人も喜ぶ聖書をなぜ引用したのかといいますと、キーマンがいるんですね。それが娘婿のジャレッド・クシュナーという人物です。安倍総理大臣が、当選が決まったときに真っ先に飛んで行って、会っているときの写真がありますよね。トランプさんと安倍さんが会ってるときに、その真ん中に、娘のイヴァンカとその夫のジャレッド・クシュナーが写っています。あのジャレッド・クシュナーという、ジャレッドという名前を聞くだけで、ユダヤ教に詳しい人は、この人はユダヤ人だなと分かるのですね。というのも旧約聖書の、ユダヤ教徒にとっての聖書の創世記の中に、ジャレッドという名前が出てくるからです。だからジャレッドという名前があれば、ああ、これはユダヤ人だろうというのがだいたい分かるのですが、この人は正統派ユダヤ人です。ユダヤ教の正統派でありまして、イスラエルべったりの人なんですね。ドナルド・トランプは、旧約聖書になんか目を通しているはずがないわけで、ここは娘婿が「これを引用したほうがいいんじゃないですか」とアドバイスをしたに違いないのです。ドナルド・トランプという人は、とにかく娘のイヴァンカに、メロメロでありまして、娘の言うことは何でも聞く。そしてその娘が愛した夫、そのクシュナーの言うことも全部聞くのです。

それでいいますと、例えば今回の閣僚選びの中で、クリス・クリスティという、ニュージャージー州の知事を国務長官に、という話があったのです。これが国務長官になりかかったら、突然、ひっくり返ったんです。どうしてか。クシュナーも不動産業者ですが、その父親がやっぱり不動産業をやっていたときに、クリス・クリスティは、以前は検事でありまして、クシュナーの父親を取り調べたんです。パパを取り調べたやつは許せないと

いうわけですね。クリス・クリスティだけは国務長官にしちゃいかんという、その一言で全部ひっくり返ったと言われています。とにかくこのクシュナーの言うことを何でも聞くのですが、この人が正統派ユダヤ教徒。そしてトランプの娘さん、イヴァンカもユダヤ教徒になったのです。結婚のときにユダヤ教徒になったのです。

これはどうしてかと言いますと、ジャレッド・クシュナーは、自分の子どももユダヤ人にしたいんですね。ところが、ユダヤ人の定義というのがありまして、ユダヤ人の定義とは、ユダヤ人の母親から生まれた子、あるいはユダヤ教に改宗した者。これがユダヤ人の定義です。ですから、クシュナーはユダヤ人ですけど、父親でしょう。イヴァンカ、つまりトランプの娘さんはキリスト教徒だったわけです。結婚して生まれた子どもは、ユダヤ教徒になれないのです。何でだ。生まれた子どもが父親の子どもとは限らないでしょう。しかし、母親の子どもであることは間違いないわけですから、ユダヤ人の母親から生まれた子どもはユダヤ人だというわけです。ユダヤ人の父親の元で生まれた子どもだからといって、ユダヤ人とは限らないという、大人の事情がございまして、こういうことになっているわけです。

ですから、イヴァンカがユダヤ人になってくれないと、自分の子どもがユダヤ人になれないわけです。そこでユダヤ教に改宗するんですが、これが大変なのです。ユダヤ教徒の母親から生まれれば簡単ですが、他の宗教の人がユダヤ教になるためには、ラビというユダヤ教のお坊さんのような人のところに通って、大変な勉強をして、学科試験と実技試験、両方にパスしないと、ユダヤ教徒になれないのです。つまり誰でも簡単にユダヤ教徒にはなれないのです。その点、イエスキリストは、誰でも広くキリスト教徒になれるようにしましたよね。あるいは、イスラム教も、イスラム教徒２人を証人として、「アラーの他に神はなし、ムハンマドは神の使徒なり」というのをアラビア語で３回となえるだけで、イスラム教徒になれるのです。仏教徒も、仏教徒になるということは大変なことじゃないわけですよね。だからこそ、キリスト教もイスラム教も、仏教も、世界宗教になれたわけですけど、ユダヤ教徒になるのは大変難しいわけです。ですからイヴァンカは、毎週、毎週、せっせ、せっせとユダヤ教のラビの元に通って、ユダヤ教の聖書を勉強したのです。ヘブライ語の暗唱も必要です。その学科試験にパスしたのです。

じゃあ実地試験は何か。台所を改造しなければいけないんです。というのも、乳製品と牛肉は全く別々にして、混じることのないように台所を造り替えなければいけないのです。というのもユダヤ教の戒律の中に、「子羊の肉を母羊のミルクで煮てはならない」という規定があるからです。これが牛肉にも適用されまして、乳製品と牛肉を一緒に食べてはいけないのです。ですから、イスラエルにもマクドナルドはありますが、チーズバーガーは存在しないのです。バーガーは牛肉でしょ。チーズは乳製品でしょ。だから一緒に食べることはできないというわけです。その戒律を家でちゃんと守っているかどうか、台所を改造させて、ラビが検査に来る。そこまでしてイヴァンカはユダヤ人になったわけです。つまり夫を愛していて、彼と結婚をしたかったからということです。それくらい正統派のユダヤ教徒です。

そのクシュナーが何を言っているかと言いますと、今、イスラエルにあるアメリカ大使館は、テルアビブにあるんですが、これをエルサレムに移転すべきだという主張をしています。もともと、今のイスラエルが建国されるときに、パレスチナ地方を、アラブ人の国

とユダヤ人の国に分けるという、国連決議によってイスラエルができたのです。ところがエルサレムは、３つの宗教の聖地ですから、ここをどこかの国の首都と定めると、けんかになるので、ここは国際管理都市とする。つまりここに首都をつくっちゃいけないよという国連決議に基づいて、イスラエルが存在したわけですよね。ところが４回の中東戦争の結果、イスラエルはエルサレムを占領しているわけです。これ、国連決議に反しているのです。ですから、建前としては世界各国が国連決議に反したイスラエルのエルサレム占領は、認めていないわけです。

それぞれの国の大使館というのは、相手の国の首都に置くという形になっています。例えば日本の、アメリカでの大使館は、ニューヨークではなくワシントンにある。アメリカの大使館も東京にあります。日本の大使館もアメリカの大使館も、世界各国の大使館はテルアビブにあるのです。エルサレムには大使館を置いていないわけです。ところがイスラエルにしてみれば、エルサレムこそがわれわれの、イスラエルの首都である。アメリカに認めてほしい。アメリカ大使館がエルサレムに移転すれば、アメリカがイスラエルのエルサレム占領を承認したことになる。これが悲願なんです。トランプはどうもそれをやろうとしているということですが、これは国連決議に反しているイスラエルのやり方を、アメリカが追認したということになります。アラブ、あるいはイスラム教徒、パレスチナ人たちの反感を買うわけです。

今、イスラエルの中にパレスチナ自治区というのがあって、パレスチナ自治区の自治政府のアッバス議長は、イスラエルを国家として承認しています。ところが、もしアメリカ大使館がエルサレムに移転したら、イスラエルを、国家としての承認を取り消すという言い方をしています。国家としての承認を取り消すということは、対テロ攻撃を再開するということとほぼ同義語ですからね。これから中東は大変な紛争に巻き込まれる可能性がありますし、エルサレムをイスラエルの首都と認めたアメリカに対するテロ攻撃というのが、これから極めて活発化してくる可能性があるということです。中東で第５次中東戦争が起きようものなら、石油の値段がポーンと跳ね上がりますよね。トランプ政権に入っている閣僚たちには、石油産業、エネルギー産業に従事していた人たちがいるわけです。その人たちにしてみれば大もうけできるという構図になっているということです。

実はアメリカではユダヤ人ロビーが活動したことによって、アメリカ議会はすでにエルサレム大使館法という法律をつくっているのです。これでテルアビブにあるアメリカ大使館をエルサレムに移すということは、もう決議されています。ところがこれ、クリントン大統領の時代に議会が決めたものですから、クリントン大統領、そんなことしたら戦争になるというので、大統領令を出して、実際にそれを行動に移すのを半年延期という形を採ったのです。半年たつ度に、あと半年延期、あと半年延期というのをずっとやり続けてきたのです。クリントン大統領の後も、ジョージ・ブッシュ大統領のときも、オバマ大統領もそれをずっとやり続けてきたのです。つまりトランプさんはわざわざ、大使館をエルサレムに移すぞと言わなくても、ただそのままにしておけば、期限が切れて、エルサレムに大使館を移すことに自動的になるのです。そんなことになったら、いったい中東がどうなるのだろうかという、非常に危険な様子になっているということです。これも娘婿が正統派ユダヤ人だから起きているということですね。もちろんイスラエルの中にも、そんなことをしたら戦争になってしまうから、それはユダヤ人としての願望は、エルサレムを首

都だって認めてほしいけど、そんなことやったら戦争になっちゃうから、そんなことやらない方がいいよと思っている人もいるのです。そういう人たちもいるのですが、今のままだとそっちに進んでいくということですね[1]。

トランプ大統領になったことによって、また宗教的な対立が起きるのかと思うと、非常に情けない思いをします。とりわけ中東においては、そういう宗教的な対立というのは他にもありますよ。IS、イスラム国の存在があります。今はイスラム国に対して、激しい攻撃が行われまして、イスラム国の支配地域は徐々に、徐々に小さくなっています。イスラム国が消えてなくなっても、あそこに集まった過激派の連中が、今度は世界に広がっていくわけです。これ、例えとしてふさわしいかどうか分かりませんが、人間の体のがん細胞に対し、やぶ医者が変にがん細胞を突っついたために、がん細胞が全身に回っていくような、そんなことになりかねないわけですね。イスラム国をたたいた、なくなった結果、世界中に過激派が散らばって、世界中でテロが起きるなんていうことも、起きるかもしれない。起きかねないという、世界は今、そういう状況になっているということです。

イスラム教は怖いなという、そういうイメージがありますが、イスラム教とイスラム過激派というのは全く違うのだということです。これもまた理解していただきたいと思うのです。これをよく痛感したのは、以前、私がヨルダンに取材に行ったときに、ヨルダンのシンクタンクの研究員にお世話になりました。その人が日本にやってきたものですから、接待をしたのです。当然、ヨルダンのシンクタンクの研究員ですから、イスラム教徒なわけですね。日本でイスラム教徒でも食べられる店をというので、トルコレストランに招待したのです。これが、12月の半ばだったのです。そうしたら、その人が、「日本にこんなにキリスト教徒がいるとは思わなかった」と言うのです。何せ東京の町はクリスマスの飾り付けでいっぱいですから、「こんなに日本にはキリスト教徒がいるのか」と言うのです。私が、「いやいや、そうじゃないのです。これ、単なるビジネスとしてやっているだけですから」と言ったら、その彼がキッとして怒るのです。「何？　キリスト教を信じているわけじゃないのか。じゃあいったい、日本人のモラルはどうなっているのだ」と、こう言うのです。「え？　なんのこと？」と思ったのですが、イスラム教というのは、生きている間に善い行いと悪い行いは、常に天使が見ているのですね。ひとりひとりに天使が２人、いや、天使を１人、２人という、それで数えていいのかという問題はあるのですが、２人の天使が右肩と左肩の上にいるのだそうです。そして、その人が悪いことをしないかどうかを、常に見張っていると。なぜ２人いるかというと、右肩にしかいなかったら、左手で悪いことするのじゃないかというわけです。両肩にいて、良いことと悪いことを全部メモして、記録を取っているのです。やがて亡くなりますと、これは死ぬのではなく、この世の終わりが来るのを待つのです。地下に埋葬されまして、この世の終わりがきたときに、人々は復活をして、ひとりひとり神の前に引き出されます。つまりこの世の終わりがきたときに復活するためには、肉体が必要ですから、死んだときにこれを火葬することは駄目なのです。以前、日本で行き倒れになっている身元不明の外国人がいまして、火葬に付したら、実はパキスタンのイスラム教徒であることが分かり、家族が日本にやってきて、「なんで火葬にして骨にしたんだ。うちの息子は復活して、天国に行けなくなったじゃな

1　トランプ大統領は2017年５月、移転を半年先延ばしにする決定を出しました。

いか」と、大変な抗議を受けたということがあります。イスラム教徒は必ず土葬をするのです。日本にもイスラム教徒、今、増えていますから、イスラム教徒のための土葬の墓地も日本には、山梨県にあります。

イスラム教徒の人たちは、常に天使によって見張られている。そして復活をして、神様の前に引き出されたときに、天使が記録をしていた善いことと悪いこととが、これ、はかりにかけられるのだそうです。善い方が少しでも重ければ天国に行ける。悪い方が多ければ地獄に落ちる。永遠の地獄の炎に焼き尽くされないのです。いくら焼かれても死ぬことができないので、永遠に苦しみ続けるという、これがコーランに書いてあるのです。つまりイスラム教徒は、常に神様が見ている。天使が見ているから、悪いことをしないのだ。犯罪の抑止効果があるのだ。それなのに「神様を信じていない日本人はどうなっているんだ」と、こう聞くのです。ここは何とか、日本の名誉のために弁じなければいけないと思って、たどたどしい英語でこれに反論しました。とにかく食事をしながらの、英語で反論するわけですから、何を食べたか全く記憶がないわけですが、こう言ったのです。「いやいや、そもそも日本では、生前、善い行いをしていれば、また人間に生まれ変わる」。あるいは極楽浄土と英語で何と言うのか分からなかったものですから、Just like heaven、天国のようなものという言い方したのですが、「善い行いをしていれば、その後、天国のようなところに生まれ変わる。でも悪い行いをすれば、次はアニマルに生まれ変わるかもしれない。こういう考え方があるのだよ」と言った途端、彼が「なるほど。それなら分かる」と言うわけですね。「それなら日本人のモラルが維持できているのも分かる」と、こう言ったのです。宗教とはそういう働きがあるのか。恥ずかしながら、そのイスラム教徒に私は教えてもらったのです。

宗教というのは人々がどれだけ正しい行いをするのかということを律する、そういう働きもあるのだろうということですね。それはイスラム教徒においても同じことなわけです。確かにイスラムの過激派がいますが、世界にはイスラム教徒は今、16億人いるといわれています。16億人も過激な人がいるわけではないわけですよね。そういう過激派というのは、非常に限られた存在なのだということです。それぞれの宗教が、理想といいますか、宗教の働き方というものをお互いが理解するということが、これからますます大切なことになってくるのじゃないかと思うんです。

私はダライラマ14世にこれまで５回お会いしていまして、話を聞いていますと、ダライラマ法王はいつも慈悲という言葉をお使いになるのですね。中国からの弾圧を受けて、チベットからインドに亡命してきている。そして中国に戻ることができないような状態であるにもかかわらず、中国に対する恨みの言葉とか、報復とか、そういうことは一切おっしゃらないわけですね。そうではない。そういう中国の共産党の人たちの心の狭さに対する憐憫といいますか、憐れみをかけたり、慈悲の心をかけるということをされてらっしゃるのですね。これこそまさに仏教の慈悲の心というのはこういうことなのかと思うわけですね。

トランプは今、イスラム教徒の締め出しということを始めました。それに対して、締め出しをされたイスラムの側が報復するぞという言い方をしています。憎しみの連鎖が続いてしまっては、世界はますます、ひどい状態になっていきます。その憎しみの連鎖をどこかで止めなければいけない。それは仏教の慈悲の心なのかなと思っていましたら、そうい

う慈悲の心、あるいは報復の連鎖を何とか止めなければいけないと考える人は、仏教徒だけではないのだということに気が付いたことがあります。

それは2015年の11月、パリ同時多発テロのときです。バタクランという劇場に来ていた人たちが、大勢亡くなりました。あのときにフランス人のジャーナリスト、アントワーヌ・レリスという人の奥さんが、その劇場に行っていて、犠牲になったのです。殺されてしまいました。当時、十何カ月の息子さんと２人だけに、取り残されたのですが、彼がその後、その手記を本にしました。本の中で彼はこう語っています。自分の妻を殺したイスラム過激派に対して、こういう言い方をしています。「君たちに憎しみという贈り物はあげない。怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる」というわけです。奥さんが殺されたわけですね。最愛の奥さんが殺されてしまった。誰でも憎しみがいっぱいになりますよね。何とか報復しようじゃないかと思う。イスラム過激派が許せないと、多くの人が普通は思うわけですね。ところが彼は、それをやってしまったらあの連中の思うつぼである。ああいうテロをすることによって、今度はイスラムに対する敵意が広がり、イスラムに対する差別が起きれば、今度はまたイスラムの側でそれを見て、過激派になっていく人たちが出てくるわけですね。その報復の連鎖というのは、どこかで止めなければいけない。それは大変つらいことですが、このアントワーヌ・レリスという人、キリスト教徒ですけど、こういうことを言っているのですね。仏教徒が言うのならよく分かるけれども、他にもこういう人たちがいるのだ。宗教を信じる、あるいは慈悲の心というのは仏教だけではないのだ、ということを感じたのですね。

こういう慈悲の心というのを広げていく。これが大切なこと。そして日本はそもそも仏教国のはずなのですね。世界から仏教国といわれているのにも関わらず、日本の国内では、特に若い人、仏教のことが全然分からないという人たちが大勢います。私もテレビの世界で仕事をしていると、若い人たちがいっぱいいるのですが、「君のところは何宗なの？」と聞くと、だいたいみんなが「さあ」と言うのですね。じゃあ少なくとも「お坊さんがお経をあげるときに、南無阿弥陀仏なの？南無妙法蓮華経なの？どっちなの？」ってヒントをもらおうとすると、それも含めて「さあ」と言うわけですね。何なんだ、これはと、こう思ってしまうわけです。何もみんなが仏教徒になる必要はないのですが、少なくとも日本で暮らしているならば、だいたい皆さん、どこかの檀家に入っているわけですからね。仏教の何派かに入っているわけですから、そういうことをやっぱり知った方がいいのじゃないか。そして、仏教の本質というものを知る必要があるのではないか。そしてこれを、またさらに世界に広げていくということ。それが私たちに求められていることではないかというふうに思います。

私は、昔は単なる、なんちゃって仏教徒でした。特にサウジアラビアに行くと、入国カードに信じる宗教を書くという欄があるのです。そういうときに私はBuddhistと書いていました。前にサウジアラビアに一緒に行った若いスタッフが、「僕、信じている宗教、ないっすから」と言って、そこにNoneと書いたのです。私、「おい、やめろ。そんなこと書くな」と言ったのです。といいますのは、以前、日本の若者がサウジアラビアに入ろうとして、信じている宗教というところNoneと書いたら身柄を拘束されまして、国外追放処分になったのです。信じている宗教がないということは、神様を信じていないということだろう。神様を信じていないということは、神をも恐れぬ行為に出るのではないか。こ

いつは危険なテロリストではないか。そんな人物はわが国に入れるわけにはいかないといって、追放されたということがあるのです。だから私は「Noneって書くな。何でもいいから書け」とこう言いまして、「BuddhistでもShintoistでもChristianでも何でもいいから書け」、なんか書いたようです。見ませんでしたけど。そうしたら無事に入れました。日本にいる限りはなんちゃって仏教徒だったのですが、そうやって海外に行って、「あなたの宗教はなんですか」といわれると、Buddhistだと書いていくうちに、自然、自然に自分はBuddhistだという自覚が生まれ、ダライラマ14世に５回もお会いして、直接にお話を伺うと、自分は本当に仏教徒なのだなという自覚を持ったということですね。

信仰心といいますか、ものを信じるということ。これが大事なことなんじゃないか。とりわけ海外でいろんな人と会うときに、「宗教を持っていない」と言うと、相当怪しまれますからね。こいつは無政府主義者か共産主義者か、テロリストではないかと思われてしまう。こういうときに堂々と、自分が信じている宗教を言えるような、そういうことが大事なことではないかな。そしてみんながいろんな宗教を信じている。いろんな宗教を信じる自由もまた認めてあげること。これが大切なことではないかと思います。前座はここまでにさせていただきます。ありがとうございました。

鍋島：池上彰先生、ありがとうございました。世界の情勢を見据えながら、それでも私たちに慈しみ、愛するという気持ちがあれば、そこから必ずお互いが理解し合えるという、ぬくもりを池上先生のご講演から感じさせていただきました。ありがとうございます。それではここで、しばらくご休憩いただきたいと思います。